

## プラトン『パイドン』における「原因論」の研究

著者	今泉 智之
号	49
発行年	1997
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14270">http://hdl.handle.net/10097/14270</a>

いま いずみ とも ゆき  
今 泉 智 之

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第49号

学位授与年月日 平成9年7月10日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)  
哲学専攻

学位論文題目 プラトン『パイドン』における「原因論」の研究

論文審査委員 (主査)  
教授 清水 哲 郎 教授 柏 原 啓 一  
教授 野 家 啓 一  
教授 篠 憲 二

## 論文内容の要旨

プラトンの哲学の中核にあるのがいわゆるイデア論であることに疑問の余地はないと思われるが、イデアのような存在を定立することについて、これまでに多くの疑問が投げかけられてきたのもまた事実である。たとえばアリストテレスがすでに、イデアのように「それ自体として独立」あるいは「…そのもの」などと形容される存在を立てることは不合理だという趣旨の批判を行っている(『形而上学』997a33-b12)。もしアリストテレスのこうした批判が妥当なものとするなら、イデアは無意味な存在だということになるが、そう単純に片づけることはできないと思われる。

プラトンにおいてイデアは、何の理由もなく立てられているわけではない。アリストテレスの場合と同様に、プラトンにおいてもはじめに与えられているのは感覚的な事実である(『パイドン』74b)。そしてその事実の「原因」として働くものとして、プラトンは「それ自体として独立」な、もしくは「…そのもの」という語で表されるイデアを定立した。そうである以上、それによって、その事実もしくは経験がうまく説明できるはずである。本論文はこのことを念

頭に置きながら、イデア論がはじめてまとまった形で語られる中期対話篇『パイドン』における最も重要な議論、すなわちイデアとの関わりでこの世界の事象の成立を説明する「原因論」を様々な角度から吟味し、そこでのプラトンの考えを明らかにしようとするものである。

## 序章 『パイドン』の梗概と原因論をめぐる問題

『パイドン』は、魂の不死の証明を主題にした対話篇である。全体は、84b8までとそれ以降の二つの部分に分けて理解されるのが通例である。84b8までに魂の不死の三つの証明、すなわち「循環（相互対応）」による証明、「想起説」による証明、「同族性」に基づく証明がなされるが、それに対して、登場人物の一人ケベスが反論をし、それを受けてソクラテスが最後に、原因論に基づいて魂の不死と不滅を証明する。

以下では次のような順序で論ずる。まず原因論の原典をどのように読解すべきかを示す（第一章）。次に当該箇所における *αἰτία* は現在「理由（reason）」「説明（explanation）」などと訳されることが多いが、その語は従来通り「原因（cause）」として理解すべきことを論ずる（第二章）。続いて、原因論の提示の直前になされる自然学者アナクサゴラスに対する批判の論点の一つ、空気やアイテールや水などの物体は原因の資格をもたないということが、原因論の内容にどのように生かされているかを見る（第三章）。そして、いわゆる仮設法の提示が原因論の展開とどう結びついているかを検討し（第四章）、その上で、「原因」という概念は善との連関で捉えられなければならないという、アナクサゴラス批判の際に提出されているもう一つの論点の、原因論との関わりについて述べる（第五章）。最後に、原因論で提示されているプラトンの考えが、『パイドン』と同じ中期対話篇『国家』でどのように発展しているかを簡単に確認する（終章）。

## 第一章 原因論の形式的読解

原因論において次のA、B、Cはどのように関係しているのか。

- A 何かは美しい。
- B 何かは〈美〉（美しさ）（＝内在形相）をもつ。
- C 何かは〈美〉（＝イデア）を分有する。

有力な研究者（ヴラストス、藤沢令夫など）の間でしばしばAとBとの区別が曖昧にされ、その両者を保証するのがCであると理解されている。しかしこの解釈にはわずかながら考察の余地が残されている。すなわち、プラトンは確かにCをAの原因と見なしているが、CはBを

も保証しているとは言っておらず、むしろBもまたAの原因であると考えている。本章ではこのことを示す。

もし〈美〉そのもの以外に何かが美しいとすれば、それはかの〈美〉を分有するがゆえに美しいのであって、それ以外のいかなるもののゆえにでもない(100c4-6)。

この文章が示唆しているのはCはAだけの原因だということであり、これ以降の議論でもCがBの原因となるとは決して語られない。

シミアスがソクラテスを凌駕するのは、……ソクラテスがシミアスのうちの大(大きさ)に対して小(小ささ)をもつがゆえにである(102C2-5)。

この「シミアスがソクラテスを凌駕する」は「ソクラテスはシミアスより小さい」と同じであり、ソクラテスのもつ〈小〉は内在形相である。そうだとするとこの文章の意味は、(Cだけでなく)BもまたAの原因となることがある、ということである。

この点次の文章は重要である。

何かを美しくしているのは、かの〈美〉(=イデア)の臨在あるいはかの〈美〉の共有である、あるいはかの〈美〉が何らかの仕方で生じているからにはほかならない(100d3-7)。

この「臨在」は「もつ(内在する)」に、「共有」は「分有」に近い意味の言葉である。そうだとするとこの文章は、BもしくはCがAの原因となる、ということを示唆していることになる。

103c10以下で〈火〉〈雪〉〈三〉などが議論に導入されている。これらの事例の身分が研究者の間で論議されてきたが、これらはすべて内在形相として理解すべきである。その主な理由は〈火〉〈雪〉〈三〉は、それぞれの対立項〈冷〉〈熱〉〈偶数〉が自分に向かってくるとそれを受け入れたりせず、場所を譲って立ち去るか滅びると言われていることである(103d5-e1、104b9-c4)。これは、102d5-103a2で内在形相〈大〉〈小〉に与えられている規定と同じであるから〈火〉〈雪〉〈三〉も内在形相と考えざるをえない。

これらの事例がいかなるものであるかは次の文章で定義されている。

それらが「何か」を占領すると、それらは、それら自身の形相だけでなく、さらに何かに常

に反対である何らかの形相をも、その「何か」が「もつ」ことを強いる（104d1-3）。

この難解な定義は〈三〉を例として次のように敷衍される。

〈三〉という形相に占領されたものは何であれ、三でありかつ奇数であることが必然である（104c 5-7）。

以上の二つの文章は、「何か」が内在形相〈三〉に占領されるとその「何か」は内在形相〈三〉と内在形相〈奇数〉の双方を「もつ」ことを強いられ、その結果三かつ奇数と述語づけられる、ということを示唆している。換言すれば、この二つの文章でも内在形相を「もつ」ことは述語づけの原因になっているのである。

以上の考察が正しければ、B（内在形相を「もつ」こと）もしくはC（アイデアを「分有すること」）がA（述語づけ）の原因となるのであって、Cは決してBの原因になることはない結論できる。

ところで、そうだとすると、なぜ原因としてCだけではなくBも導入されたのか。

これを考えるために注意すべきは、この議論が魂の不死の証明を意図しているということである。議論のなかで魂は内在形相と同列に扱われている。たとえば内在形相〈三〉が、それが向かっていく（＝占領する）当のものに〈奇数〉をもたらし、そのため〈奇数〉の対立項〈偶数〉を受け入れない（104e7-105a5）のと同様に、魂はそれが占領するもの、すなわち身体に生をもたらし、その限りで生の対立項である死を受け入れないから不死である（105d3-e9）、というようにして魂の不死が証明される。その証明のためにBすなわち内在形相をプラトンは導入しなければならなかったのである。

またそもそも、『パイドン』の当該箇所「原因」とは、たとえば〈美〉のアイデアの分有が何か美しいということの原因であることはどういうことなのか。あるいは、〈大〉という内在形相をもつことがシミアスがソクラテスに比べて大きいことの原因であるとは、さらに、〈火〉という内在形相があるもののうちにあることが、それが火でありかつ熱いことの原因であるとはどういうことを意味しているのか。序章で述べたように、当該箇所の「原因」という言葉の意味をめぐることは、研究者の間で意見が対立してもいるので、次章でこの問題を検討する。

## 第二章 「原因」について

本章では『パイドン』の当該箇所の *αἰτία* を「理由」もしくは「説明」と解するヴラストス

の解釈を批判的に検討しながら、*aitia* は「原因」と見なしても差し支えないことを示す。

ヴラストスはアイデアが、アリストテレスの枠組みで言えば、目的因もしくは作用因であるという見解を退けているが、その上で、*aitia* を理論的なものと見なす解釈を示した。たとえば次のような問いと答えがあるとする。「なぜこの図形は正方形なのか」。「それは、その図形が四つの等しい角とをもっているからである。もしそれが、その図形を正方形にはしない四つの等しい辺をもっていたなら、それは菱形でありえただろう」。ここで「なぜ (Why?)」という問いに対する「…だから (because…)」という答えは、黒板上のチョークで書かれた正方形が実際に生起すること (occurrence) の説明を意図しているのではない。問題になっているのは「その図形を正方形にしているのは何か」すなわち「なぜわれわれはその図形を正方形として分類し、ほかの形としては分類しないのか」ということであって、その問いに答えるには、チョークで書かれた線がたまたま、正方形であるための理論的な条件に合う形だった、ということを示せばよい。ヴラストスは、当該箇所ではこのようなことが念頭に置かれていると考えて、*aitia* を理論的なものとして解釈した。〈正方形性〉〈美〉などのアイデア、すなわち形而上学的な実在はこのような論理的な働きを有しており、それには因果的な作用力は帰せられていないというわけである。

103c10以下では〈火〉〈雪〉〈三〉〈二〉〈発熱〉などが導入されるが、ヴラストスはこれらの事例を $\Gamma$ という記号で表記し、これらのそれぞれに対応する〈熱〉〈冷〉〈奇数〉〈偶数〉〈病気〉には $\Phi$ という記号を当てた上で、そこでの議論を次のように定式化した。「xがFであるのは、xが $\Gamma$ を分有し、 $\Gamma$ が $\Phi$ を厳密含意する (entail) からである」。あるいは「xがFであるのは、それがGである以上、 $\Gamma$ を分有していなければならないからである。そして $\Gamma$ は $\Phi$ を厳密含意するので、xは $\Phi$ も分有していなければならない、そのためにxはFでなければならない」となる。ここで $\Gamma$ 、 $\Phi$ はそれぞれアイデアであって、G、Fは、そのアイデアに対応する、個物に与えられる述語（もしくは性質）である。この第一の定式を〈火〉を例にして具体化すると次のようになる。「個物が熱いのは、その個物が火のアイデアを分有し、火のアイデアが熱のアイデアを厳密含意するからである」。

ヴラストスは〈三〉－〈奇数〉、〈二〉－〈偶数〉などを数的な (arithmetical) 事例、〈火〉－〈熱〉、〈雪〉－〈冷〉、〈発熱〉－〈病気〉などを自然的 (physical)、生物学的 (biological) な事例と呼んで区別している。もしここで与えられているのが数的な事例だけであったなら、先の〈正方形性〉の場合と同様に、それは因果的な意味はもたない。しかし、ヴラストスが言うには、〈発熱〉－〈病気〉などの場合はそうではない。その場合当の〈発熱〉のアイデア ( $\Gamma$ ) と〈病気〉のアイデア ( $\Phi$ ) とを結びつけている厳密含意関係は、因果的な作用力を保証されてはいないが、因果的な含意 (causal implication) を有することが期待されて

いる。

こうしてソクラテスがたとえば〈雪〉のアイデアは冷たいことの *aiúa* だと言うとき、その主張は、この世界の因果的な構造に結びついている。この世界の因果的な構造とは、たとえば、われわれが温度をあるところまで上げると雪は水にならなければならない、という事実のことであり、それが表現しなければならないのは自然の (physical) 法則なのであるが、その自然の法則は理論的な (logical) 必然性をもつとされる。そして、プラトンは、われわれの経験する雪が冷たいのは〈雪〉のアイデアが〈冷〉のアイデアを厳密含意しているからだと主張し、また、あらゆるアイデア、すなわち、〈雪〉－〈冷〉などの自然的なものと同様に〈三〉－〈奇数〉、〈二〉－〈偶数〉などの理論的、数学的なアイデアも同様に、永遠であり、相互に不変の関係を保持しているのであるから、プラトンが示唆しているのは、自然の法則は、もしわれわれがそれを知ることさえできれば、〔たとえば「三であるなら奇数である」などの〕数的、論理的な真理がもつと同じ必然性をもつであろうということである、とヴラストスは結論する。

以上がヴラストスの解釈の概要であるが、以下ではそれを批判しながら *aiúa* の意味づけについて論ずる。

まずヴラストスの、アイデアが目的因でも作用因でもないという見方は受け入れられない。当該箇所アイデアと目的因 (目的論) との関連については第五章で論ずるので、作用因との関わりについて述べると、当該箇所ではアイデアの「臨在」「共有」などがこの世界の美を「引き起こす (*poiei*)」と言われており、これを字義通りにとれば、アイデアは何かを引き起こすものであるという意味で作用因、もしくは「原因」と解さざるをえない。

また〈火〉〈雪〉〈三〉〈二〉〈発熱〉などが導入される部分の解釈にも難点がある。ヴラストスはそこでも「分有」という語を用いて議論を定式化しているが、その箇所ではその言葉全く用いられておらず、またその解釈でヴラストスは、数的事例と自然的・生物的事例とを区別していたが、そのような区別はテキストから裏づけられない。

では、当該箇所ではどのようなことが語られているのか。

重要なのは、述語の主語が一貫して「何か (*ti*)」(100c4) のように無規定的なものとして表記されていることである。そして主語が無規定なものとして表記されているのは、原因論が生成消滅を記述しようとするものだからである。たとえば無規定な主語は、〈美〉のアイデアの分有することによって美として生成する。また、〈火〉という内在形成が無規定なものを占領すると、占領されたものは、〈火〉と〈熱〉という形相をもつことを強いられ、そのことを原因として火でありかつ熱いものとして生成するのであるが、〈火〉の対立項〈冷〉がそこに接近してくると、〈火〉は場所を譲って逃げ出さか滅びるので、限定を受けていたものはその限定を失って消滅するのである。

ヴラストスの解釈で *aiṛia* の論理という面が強調されているのも、主語が無規定のものとして提示されているということが見逃されている結果ではないかと疑われる。

### 第三章 アナクサゴラスとの関係

では「それ自体として独立」なアイデアはどのようにして「原因」としてこの世界に働きかけることができるのであろうか。本章では、この問いが適切なものであるかどうかの検討も含めて、この問題について考える。そのために手がかりにするのは、原因論の提示の直前になされるアナクサゴラス批判である。その批判の論点の一つに、空気やアイテールや水などの物質・物的なものには原因の資格をもたないというものがある。ではなぜアナクサゴラスを批判するに際して、プラトンは物体は原因ではないという考えを明示したのか。本章ではこの問題を、アナクサゴラスが世界の秩序づけの原因として立てている知性と、批判の直後に展開される原因論におけるアイデアの身分を対比させることによって考察するものであるが、その際アナクサゴラスの学説における「知性（ヌース）」と『パイドン』の原因論におけるアイデアがともに「それ自体として独立」と規定されている点に着目する。アイデアはこの規定によりアナクサゴラスの知性のある側面を継承しているが、他方知性とアイデアには大きな違いがある。本章はそれを明らかにすることで、なぜアナクサゴラスを批判するに際してプラトンは物体は原因ではないという考えを明示したのかを考察するが、それによって併せて「それ自体として独立」なアイデアはどのようにしてこの世界に働きかけることができるのか、という問題に接近する手がかりをえたい。

さて、アナクサゴラスによれば、はじめに世界は「万物の種子」（Fr.4）と呼ばれる微小粒子（物質）が混沌とした状態にあったのだが（Frr. 1, 4, 6）、その混沌状態に回転運動を引き起こして世界の秩序づけを行うのが知性である。知性が「それ自体として独立」と規定されているのは、知性もまた混沌状態に含まれていたとしたら、微小粒子に妨げられて支配力を失ってしまうからである（Fr.12）。また知性は「万物のうちで最も薄く、最も純粹」（Fr.12）とも言われているが、これは知性が非物的なものに近づいていることを示唆している。こうして知性が回転運動の原因として働くためには、それがほかの諸物体と混和せずそれ自体として独立であること、非物的なものに近く純粹であること、という二つの条件だったことがわかる。

またアナクサゴラスが知性を「それ自体として独立」と規定したことには歴史的な背景もある。アナクシメネスなどの初期のイオニアの自然学者は世界の構成要素である火、空気、水、土などの物質にこの世界の動き・変化の原因を内在させていたが（物活論）、パルメニデスによってこの世界の変化、生成消滅は死すべきもの迷妄にすぎないとされた。そこでパルメニデ



スの後に現れたアナクサゴラスはもはや変化の原因を物質からなる原初の混和状態に内在させるわけにはいなくなり、動き・変化の原因は物質の外部に求められることになった。それが「それ自体として独立」な知性にほかならない。

ところが実は、アナクサゴラスにおいては物質と物質に動を引き起こす原因としての知性との間の差は、相対的なものにすぎない。「万物のうちで最も薄く、最も純粋」という最上級を含んだ規定自体が、いかに知性が非物体的なものに近い存在であろうと、やはり物的なものの範疇に属していることを示している。アナクサゴラスにとっては、実在性の最終的な規準は物体であることにあったと見られる。そうだとすれば、その学説は一種の唯物論である。そしてプラトンはこの点を念頭に置いてアナクサゴラス批判の際に空気などの物質・物的なものは原因ではないという考えを表明したと考えられる。

アナクサゴラス批判を踏まえて提示される原因論では、まずイデアが、アナクサゴラスの知性と同じく「それ自体として独立」に存在するということが前提され、その上でこの世界の事象はそのイデアとの関与の有無によって生成消滅するとされている。イデアがこの世界に生成消滅を引き起こす役割を担っているのは、アナクサゴラスにおいて「それ自体として独立」である知性が動・変化の原因であるという点を継承していると考えられる。これが知性とイデアの類似点である。ただしイデアの『パイドン』前半における「純粋」「見えないもの」「神的なもの」などの規定は、イデアが「物的なもの」ではないということを含意しており、その意味でイデアは、物的なものに属するアナクサゴラスの知性とは基本的な性格を異にしている。そしてその点で『パイドン』の原因論は、アナクサゴラスにあっては曖昧のままであった、物質とそれに動を引き起こす原因をいかにして区別するかという問題を解決していると考えられる。これが原因論がアナクサゴラス批判に対して有する意義である。そうだとするなら、なぜアナクサゴラスを批判するに際してプラトンは物体は原因ではないという考えを明示したのかという問いに対しては、アナクサゴラスの知性には物体としての側面が残されているのを批判するためだと答えられる。

さて、以上の理解が正しいとすれば、「それ自体として独立」なイデアはどのようにしてこの世界に働きかけることができるのかという問題に関して重要なのは、むしろイデアはアナクサゴラスの知性と同様に、それ自体として独立した存在であるからこそ、この世界に働きかける力をもつことができるということである。パルメニデスの問題提起を受けた後に、この世界に変化・動きを認めるという常識的な見方を保持するためには、それは、この世界の変化を原因となるものを規定する際にはどうしても必要な性格づけであった。

とはいえ、イデアに「それ自体として独立」という規定を与えることと、そのイデアが「分有」「共有」される、もしくはこの世界に「臨在」という事態とは、やはり互いに相容れ

ないと見られるかもしれない。では、そのように相互に矛盾していると思なされかねないような仕方ではプラトンがアイデアを規定したのはなぜなのであろうか。またアイデアに与えられている「それ自体として独立」「…そのもの」という二つの性格づけは、互いにどのように関係しているのでしょうか。次章では、『パイドン』において提示される「仮設法」と原因論との連関を検討しながら、この問題について考察する。

#### 第四章 仮設法との連関

本章では前章で残された問題を、原因論の仮設法との連関を考慮しながら検討する。

仮設法は二箇所に分けて次のように語られている。

##### 〔仮設法A〕

私が最も堅固であると判断するロゴスをそれぞれの場合に前提し（A－a）、何であれそのロゴスに調和すると思われるものを真と見なし、他方そうでないものを真でないと見なす（A－b）、原因についても、またほかのすべてのことについても（100a3－7）。

##### 〔仮設法B〕

もし誰かがその前提そのものにこだわるとしたら、君はそれを放っておいて、前提から始められた諸々のことが相互に調和するか調和しないかを考察するまでは、答えないだろう（B－a）。そして、その前提の論拠（ロゴス）を与えなければならない場合には、上位にある前提のうちで最善と見えるものを改めて別の前提として立てて、同じようにして君は論拠を与えるだろう、最後に何か十分なものに到達するまで（B－b）（101d3－e1）。

ロビンソンはこの仮設法AとB－aをおおよそ次のように解釈した。すなわち、求められる結論に到達するためには次の四つの手続きが必要である。

- (1) その結論に導くように思われるもののうちで最も堅固と判断される前提を立てる（A－a）。
- (2) その前提から諸帰結を導く。
- (3) その諸帰結が相互に矛盾しているかどうかを検討する（以上B－a）。もし矛盾していれば、もう一度別の前提を立ててはじめてやり直す。しかし、矛盾が起こらない場合には
- (4) 前提から帰結することを真と見なし、その否定が前提から帰結するものを偽と見なす（A－b）。

しかしこの解釈には問題がある。まず、仮設法A－bにおける、前提として立てられたロゴスと調和するということをロビンソンは結局「前提から論理的に帰結する」の意味だとしたが、他方B－aにおける「調和する」のほうは「矛盾しない」の意味に取っている。これには無理

がある。次に、B-aの「前提から始められた諸々のこと」をロビンソンは「前提からの論理的諸帰結」と見なしているが、この表現にはそうした意味は読みとれない。さらに彼は、仮設法と原因論とのつながりは偶然のもののように見えるとしているが、文脈を追えば、両者の密接な連関は明らかである。

最後の、仮設法と原因論とのつながりという点で優れた解釈を示したのはギャロップであるが、ギャロップの解釈にも、アイデアが存在するという前提と、それから「始められた」、〈美〉のアイデアを分有するがゆえに何かあるものは美しい、という命題とを一括している点などに問題がある。

以上のような点を考慮すると、仮設法A-bとB-aは結局次のように解釈すべきである。B-aの「前提から始められた諸々のこと」における「前提」とはアイデアが存在するという前提を指しており、そこから「始められた諸々のこと」とはアイデアが「分有」「臨在」「共有」などの様々な仕方でこの世界と関係していることを示唆している。また仮設法A-bにおける「(前提としての) ロゴスと調和すると思われるものを真と見なし、他方そうでないものを真でないと見なす」が意味しているのは、「何かは〈美〉のアイデアを分有するがゆえに美しい」「何かに〈美〉のアイデアが臨在しているがゆえにそれは美しい」「何かは〈美〉のアイデアを共有するがゆえに美しい」などは、アイデアが存在するという前提から「始められた」のであり、それゆえ真と見なせるということ、他方「何かが美しいのはそれが鮮やかな色や形などをもつからである」などはその前提からは「始められ」ないのであり、その限りで真でないと見なされなければならないということ、この二点である。仮設法のこの手続きによって後者のようなある種の唯物論的な考え方が排除されているのであって、それは、原因論に先行してなされる自然学者批判の趣旨とも合致する。

では、なぜそもそもアイデアの存在は前提されるのであろうか。

仮設法A-aでは「私が最も堅固だと判断するロゴスをそれぞれの場合に前提する」と言われている。アイデアが存在するというロゴスを前提することが「原因の発見」(100b8)を目指してA-aの手続きを具体的に行ったものだとするれば、その際に何らかの推理が働いているのは明らかであるが、その推理は次のようなものと考えられる。この世界における美には、人間、馬、衣服など様々な事例があり(78d-e)、われわれはこの世界にあって、このような数多くの美を経験している。しかしその経験は、原初的で純粋な場面にまで遡るならば、「この人間は美しい」「その馬は美しい」というような仕方で、あるいはまた「この色は鮮やかで美しい」「その形は鮮やかで美しい」というような具合になされるわけではない。もっと端的に「美！」として認識するのである。そのように端的に「美！」あるいは「美そのもの」として経験したものが人間であった、あるいは馬であったなどとわかるのは、そうした原初的な認識の場面を

いったん離れて何か反省を加えた結果である。

そうだとすれば、そうした経験がなぜ起こるのか、あるいはそうした経験の原因となるものは何か、ということをお問わなければならない局面に至ったときには〈美〉そのもの、すなわちアイデアが存在するということをまず前提するのが「最も堅固」である。その上でこの世界における美は、その〈美〉そのものと「分有」であれ「共有」であれ「臨在」であれ、何らかの仕方に関与することによって成立していると考えればよい。アイデアが存在するという前提を立てる際にはこのような推理が働いている。

では、アイデアの「それ自体として独立」という規定と、アイデアが「分有」「共有」される、あるいはこの世界に「臨在」するという事態とは、また「そのもの」というアイデアのもう一つの規定とはどのように関係しているのか。

前章で、生成消滅の原理としてのアイデアに与えられている「それ自体として独立」という規定は、アナクサゴラスにおいてこの世界の動・変化を引き起こす「知性」がそれ自体として独立であるという事態を受けたものと述べたが、他方原因論はそれと同時に、美に端的に出会うというようなわれわれの経験の説明も行われなければならない。この点で大切なのは、アイデアが存在するという原因論を基礎づけている前提を述べる際にはプラトンは「それ自体として独立」という言い方をしているが、他方「分有」「共有」「臨在」などが語られるときには「そのもの」という言い方がされているということである。すなわちそれによって、この世界の事象の生滅を「それ自体として独立」のアイデアによって説明し、併せて、たとえば「美そのもの」を経験・認識するということをアイデアとの関係によって説明することが可能になっている。

実際は、こうした経験を説明することとこの世界における事象の生滅を説明することとは、同一のことの二つの側面であろう。美、大、火などについての経験が成立しているということは、言い換えれば、この世界にそれらの事象が生成していることにほかならない。この同一の事態の二つに側面にそれぞれ「…そのもの」と「それ自体として独立」という二つの言い方が対応している。このようにして、アイデアに「それ自体として独立」という規定を与えることと、そのアイデアが「分有」「共有」される、もしくはこの世界に「臨在」するという事態とは互いに相容れない、という予想される問題提起に対してプラトンなりに対処しているのがわかる。

ところで、仮設法B-aの「前提から始まった諸々のことが相互に調和するか調和しないかを考慮する」はどういうことを意味しているのか。この「考察する」という言葉が、「ロゴスのなかで存在するものの真理を考察する」(99e5-6)ということをお踏まえていることに注意すれば、そこでは、「真理」すなわちアイデアの認識に到達するには、人間が美しいことと馬が美しいことは同じ(「調和する」)なのか、それともそうではないのか、あるいは馬と衣服の場合はどうであるのか、これらのことを「考察」しなければならない、ということが示唆され

ていると考えられる。

以上が仮設法 A と B-a の原因論との連関を考慮した解釈であり、同時に、アイデアの存在がなぜ前提されるかについて、また前章から持ち越した問題について論じた。残る B-b をどう読み解くかについては、次章で原因論と目的論との結びつきを示した上で述べる。

## 第五章 原因論の目的論的解釈

原因論は、この世界を成立させる原因となるものは善との連関で捉えられなければならないという論点が含まれたアナクサゴラス批判の直後に提示されるにも拘わらず、そこには善がこの世界の成立に関与しているという考えが明示的には展開されていない。そこから、原因論においては目的論は提示されていないという解釈がしばしば行われてきた。これに対して、原因論においても目的論への志向は継承されていると見なす研究者も存在するが、テキストに密着した形での目的論的な解釈は、これまでほとんどなされていない。筆者は、原因論において目的論は提示されているという見方をとるものであるが、本章ではその解釈を示したうえで、仮設法 B-b を述べたプラトンの意図に言及する。

まず、原因論はいわゆる「第二の航海」として語られるものであるが、テキストからそれは目的論的原因へ向けての再出発であったと読みとることも可能である。そこで注意すべきは、すでに見てきたように原因論は、この世界の事象の生成消滅を引き起こす原因を述べているということである。もしその理解が正しいとすれば、原因論はある種の目的論として解釈可能である。というのは、たとえば後期の著作『ティマイオス』(27dsqq.) では、最善なる原因である世界制作者(デミウルゴス=神)が永遠不変であるアイデアをモデル(模型)として生成消滅するこの世界を作り出した、という目的論が展開されているが、アイデアがこの世界の消滅に関与しているという意味では、『パイドン』の原因論はこの『ティマイオス』の説と無関係ではない。そして『パイドン』前半で語られている、アイデアとこの世界の事象とを区別しもっぱら前者に価値を認める考え方を参照すれば、原因論はアイデアという価値を含意した存在に訴えてこの世界の成立を説明するものと言うことができ、その意味でも原因論はある意味で目的論だということになる。

しかし以上の点に加えて着目したいのは、原因論の議論 B、C である。そこで導入されている内在形相は、この世界のうちにあってある種の同一性を示すものである。というのは、たとえば内在形相〈大〉は対立項〈小〉の接近の際、自身の同一性を保とうとするがゆえにその受け入れを拒否して、場所を譲って逃げ出すか滅びるのであるが(102e2-3)、しかし他方〈小〉が接近してこなければ〈大〉は〈大〉として同一性を保ちながら、その場所にとどまり続け

ると解されるからである。この意味で内在形相は、常に不変で同一性を保つとされるアイデアに準ずる身分にある。そして内在形相が以上のようにこの世界のうちにあって同一性を保つとすれば、それは他方、この世界についての確定的な認識を保証するものであることになる。対象の側に同一性を保つものがあるということは、認識する側から言えば、この世界の認識に関してたとえば〈大〉を〈大〉として同定することの可能性が確保されていることを意味しているからである。

ところで原因論は〈美〉〈善〉〈大〉やそのほかすべてのアイデアが存在するということを前提にした上で述べられている（100b5-7）ので、このことは、原則としてこの世界におけるすべての事象について妥当するはずである。

そうであるならば、原因論はこの世界にある種の秩序をもたらしているということにもなる。この世界における一つ一つの事象がそれとして同定可能だということは、換言すれば、この世界に分節化が生じていることを意味し、それはまた、この世界にある意味で秩序が生じていることにほかならない。

まとめると、『パイドン』の原因論は、一方でそれ自体価値的なものであるアイデア、もしくは内在形相によってこの世界の生成消滅を説明しながら、他方この世界における様々な事象の同定を保証することでこの世界の秩序性を説明しているという、この二つの意味において、目的論を、少なくともその萌芽となるものを提示している、ということになる。『パイドン』以後に書かれたとされる、『国家』における〈善〉のアイデアを頂点とする目的論（508e-509b, cf. 517b-c）、あるいはすでに触れた『ティマイオス』における目的論などはいずれも、『パイドン』の原因論の発展形態である。

さて原因論が以上のようなものだとする、そのなかで、仮設法B-bが述べられた意図を理解する上で大切なのは、原因論ではプラトンの目が主にこの世界の事象、そのひとつひとつを意味あるものとして基礎づけるにはどうすればいいかという点に向けられているということである。これに対してB-bで示唆されているのは、原因論を基礎づけているアイデアが存在するという前提をさらに根拠づけるにはどうすればよいかという問題である。結局のところB-bを原因論と直接結びつけて解釈するのは難しいのであるが、それは、両者におけるプラトンの視点が若干異なっているという点から止むを得ないことでもある。

ところで、原因論、とりわけ内在形相が導入される議論において顕著なのは、アイデアとこの世界との結びつきである。それは一方では、この世界の事象を価値という側面から捉えなす議論として、他方、この世界の事象を認識する知覚と、アイデアを認識する知（知性）との関係を見直す議論として読むことができる。本論文では最後に、この二点が『国家』でどのように展開されることになったのかを簡単に見届ける。

## 終章 前途瞥見

『国家』の「太陽の比喩」では、〈善〉のアイデアが最も高い位置を占め、その下にそれ以外の諸々アイデアがあり、さらにこの世界の事象はその諸々のアイデアを分有することによって成立している、という三元論が指示されている。そこで示唆されているのは、〈善〉のアイデアがそれ以外の諸々のアイデアの存在と認識の「原因」であるという見方である。この世界の事象が諸々のアイデアの分有によって成立しているものである以上、この世界の事象の最終的な原因は〈善〉のアイデアということになる。ただし前章でも指摘したとおり、この目的論は『パイドン』の原因論の発展形態である。

次に、知覚と知の関係については、三本の指の比較の議論から示唆を得ることができる。ここで示されているのは、知性が知覚の認識の不確実なところを補助するということである。ここでは、知覚をこの世界の事象の認識に、他方知をアイデアの認識に厳密に二分して割り当てるというような仕方では理解されいない。そしてこの知性による補助ということは、『パイドン』の原因論における、対立項を受け入れないという意味で同一性を保っている内在形相をこの世界に内属させることにより事象の同定の説明するという議論を経て可能になったのではないかとと思われる。ただし『国家』の「太陽の比喩」「三本の指」は、いずれも最終的には『国家』の主題である正義論との連関を考慮して読み解かなければならないものである。それはこれからの課題としたい。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、プラトンの中期対話篇『パイドン』に含まれる、アイデアとの関わりでこの世界の事象の成立を説明する「原因論」を、先行する諸研究を批判的に吟味しつつ、様々な角度から検討し、新しい解釈を提示する作業を通して、アイデア論がプラトンの思索のなかでどのようにして成立し得たのかという問題に対して一つの見通しを立てようとするものである。

序章では、『パイドン』の概観をし、原因論が魂の不死と不滅の最終証明の文脈で登場することを示した上で、原因論をめぐる諸問題を提示する。

第一章では、原因論の基本的テキストからA（＝何かは美しい）、B（＝何かは〈美＝内在形相〉をもつ）、C（＝何かは〈美＝アイデア〉を分有する）、を抽出し、その間に成り立つ関係について論じる。すなわち、先行する諸研究者がAとBとを明確に区別せずに、両者を保証するのがCであると理解するのに対し、プラトンは確かにCをAの原因と看做しているが、Cは

Bをも保証しているとは言っておらず、むしろBもまたAの原因であると考えていると読解すべきであると論じる。さらにここから、魂の不死につながる議論の検討を通じて、Aの原因としてBが導入されたことの理由として、魂が内在形相に対応するものとして扱われている点を指摘する。

第二章では、『パイドン』当該箇所〈aitia〉を「理由」もしくは「説明」と解するヴラストスの解釈を批判的に検討しながら、〈aitia〉を「原因」として理解すべきことを論じる。すなわち、アイデアの「臨在」「共有」がこの世界の美を「引き起こす (poiei)」と言われている点に依拠して、アイデアは何かを引き起こすものとして作用因であると解釈する。また「個物が熱いのは、その個物が火のアイデアを分有し、火のアイデアが熱のアイデアを entail するからである」とするヴラストスの解釈にも難点があるとして、ここで主語（個物）が無規定なものとして表記されていることに注目し、原因論はアイデアの分有による生成消滅を記述するものである、という解釈を提示する。

第三章では、『パイドン』の文脈において「原因論」直前に位置する「アナクサゴラス批判」に注目し、それと原因論との思索の連続性を強調する解釈を提示する。まずアナクサゴラスの残存断片に依拠して、ヌースが「それ自体として独立」と規定され、世界の動き・変化の原因として物質とは別に立てられるとはいえ、その「万物のうちで最も薄く、最も純粹」という性格付けは、ヌースがなお物体性に帯びたものであることを示していると指摘する。これに対し原因論では、アイデアが「それ自体として独立」とされ、これに生成消滅を引き起こす役割が帰せられている点で、ヌースの性格付けを継承しているが、前者は全く非物体的であるという点で後者とは基本的に異なるとする。ここから「アナクサゴラス批判」の論点の一つである、物的なものは原因の資格をもたないという主張との思索のつながりを指摘する。

第四章では、それ自体として独立なアイデアがいかにして生成消滅の原因となり得るかという問題を念頭におきつつ、当該文脈における仮設法の提示が原因論の展開とどう結びついているかを検討する。すなわち、前提を立て、そこからの諸帰結を吟味する仕方である仮設法が提示される箇所についてのロビンソンおよびギャロップの解釈を批判的に検討した上で、「前提－諸帰結」は「アイデアが存在する」と「アイデアが分有等の様々な仕方でこの世界と関係する」との関係として解すべきことを主張する。ここからさらに、アイデアの存在を前提すること、およびアイデアの「それ自体として独立」という規定とアイデアが「分有」されるという事態との整合性を論じる。

第五章では、世界の原因は善との連関で捕らえなければならないとする、「アナクサゴラス批判」のもう一つの論点と原因論とのつながりを検討する。すなわち、「原因論」においては善がこの世界の成立に関与しているという考えが明示的には展開されていないため、諸研究者



はここに目的論的要素を認めず、また、それを見出すとしても適切なテキスト解釈としては提示していないとした上で、原因論に目的論の要素を認める解釈を提示する。すなわち、原因論は、後期の対話篇『ティマイオス』における、最善なる原因である世界制作者がアイデアを模型として生成消滅するこの世界を作り出したという目的論的説明への途上にある思索であると位置づける。さらに、原因論はそれ自体価値的なものであるアイデアもしくは内在形相によってこの世界の生成消滅を説明し、かつ、諸事象の同定を保証することで世界の秩序性を説明している点で、少なくとも目的論の萌芽を含んでいると結論する。

終章では、アイデアとこの世界との結びつきの問題が中期対話篇『国家』でより発展した仕方で提示されていることを指摘して、原因論のプラトンの思索における位置づけについての見通しを立てる。

以上、本論文は、『パイドン』中の「原因論」に焦点を絞って、その精確な読解とプラトン哲学における位置づけを目指して、先行諸研究の成果を批判的に検討し、それに対峙しつつ独自の見解を提示したものである。ことに当該研究分野の現時点における課題を明確にした点、および原因論における内在形相の位置づけ、アナクサゴラス批判と思索上の関連、後の対話篇における思索の展開との関係等について、独自の解釈の試みを提示した点において、本論文は斯学の発展に寄与するものである。また、論文提出者がここに提示した独自の解釈をより根拠付けられたものとして展開することが期待できる。

以上により、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。